

登場人物

下人：使われていた主人から、四、五日前に「」を出された。  
 老婆：死人の髪の毛を抜いて、かつらにする商売を行っている。

場所

「」の下 ↓ 楼上

時間

ある日の「」

○『羅生門』発表の時代  
 『羅生門』は大正四年「帝國文学」誌上に掲載された。同年には夏目漱石の『道草』や森鷗外の『山椒大夫』なども発表されている。  
 なお、この前年（大正三）には漱石の『ころも』が、翌々年（大正四）には志賀直哉の『城崎にて』が発表された。

あらすじ

次の表内の空欄に適切な語句を書き入れ、『羅生門』のあらすじをまとめてみましょう。

場面	人物	状況、出来事、心情、会話文など
羅生門の下	下人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・雨に降りこめられ、行き所がなくて、「」。</li> <li>・明日の暮らしをどうにかしようとして、「」</li> <li>「」よりほかに仕方がない」ということを、積極的に肯定するだけの「」が出ずにいた。</li> </ul>
羅生門の楼上へ出る梯子	下人 老婆 下人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・死骸の中にうずくまる、猿のような老婆を見つける。</li> <li>・六分の「」と四分の「」</li> <li>・呼吸をするのさえ忘れる。</li> <li>・女の死骸から髪の毛を一本ずつ抜き始めた。</li> <li>・「」が少しずつ消え、老婆に対する激しい「」</li> <li>・「」が強さを増す。</li> </ul>
羅生門の楼上	下人 老婆 下人	<ul style="list-style-type: none"> <li>・老婆に太刀をつきつける。「」の心が冷める。安らかな「」</li> <li>・「」と「」とがあるばかりである。</li> <li>・「この髪を抜いてな、かつらにしようと思うたのじゃ。」</li> <li>・「これとてもやはりせねば、餓え死にをするじゃやて、」</li> <li>・「することじゃわいの。」</li> <li>・老婆の話を聞いているうちに、心にある「」が生まれ</li> <li>・「またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。」</li> </ul>

漢字の学習（次の漢字の読みを書きましよう。）

災い	（ ）	砕く	（ ）	始末	（ ）
顧みる	（ ）	暇	（ ）	余波	（ ）
空模様	（ ）	影響	（ ）	夕闇	（ ）
局所	（ ）	肯定	（ ）	遠慮	（ ）
幸い	（ ）	濁る	（ ）	天井裏	（ ）
揺れる	（ ）	無造作	（ ）	範囲	（ ）
未練	（ ）	塞ぐ	（ ）	円満	（ ）
成就	（ ）	鋭い	（ ）	存外	（ ）
平凡	（ ）	侮蔑	（ ）	恨む	（ ）

語句の学習（語句と意味の組み合わせを線で結びましよう。）

- 途方にくれる ・ 決着をつける。
- とりとめのない ・ 言い方が適切でないため誤解が生じる。
- かたをつける ・ どうしたらいいかわからなくて困る。
- 高をくくる ・ はつきりとしたまとまりがない。
- 語弊がある ・ 相手の程度を見くびる。

芥川龍之介について（一八九二（明治二五年）～一九二七（昭和二年））

東京に生まれる。誕生日の明治二五（一八九二）年三月一日は、辰の年辰の月辰の日で、しかも生まれた時刻も辰の刻（午前八時ごろ）だったところから、辰之助「龍之介」と命名されたという。生まれつき神経質でひよわな体質の少年だったが、学業成績は抜群で、泉鏡花や江戸の戯作に親しんだ。

大正二年、一高から「」大学英文科に進学。雑誌「」（第三次・四次）

に参加し、創作活動も在学中に開始した。「」について発表した「」が

「」に激賞され、『芋粥』『手巾』を書いて文壇に登場。

大正四年末からは、漱石門下の集まりである木曜会にも出席した。結婚の年（大正七）には『蜘蛛の糸』を発表。また『』を新聞に連載した。さらに『奉教人の死』や『枯野抄』などによって、日常生活とは異質の感動を求める、「」の作風を明瞭に示した。

大正一一年、『藪の中』『トロッコ』などを発表するが、このころから神経衰弱や胃けいれんなどに悩み、身体の不調を訴えるようになる。さらに関東大震災以後の「」の勃興という社会機運の中で、創作活動も停滞しがちになった。「」の勃興という社

昭和二年、『河童』の執筆や「」との論争などの活動を行うが、「唯ぼんやりした不安」を訴えて、枕元に『聖書』を置いて服毒自殺する。『歯車』『或阿呆の一生』『西方の人』などが、遺稿として残された。